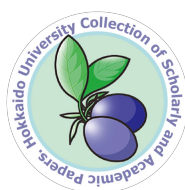




Title	トルクメン語の必要性を表す二つの形式
Author(s)	日高, 晋介; Hidaka, Shinsuke
Citation	北方言語研究, 15, 35-52
Issue Date	2025-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/112970
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94614
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_Hidaka.pdf



トルクメン語の必要性を表す二つの形式

日 高 晋 介
(筑波大学)

キーワード：チュルク諸語、南西語群、トルクメン語、拘束的モダリティ、認識的モダリティ

1. はじめに

本稿では、トルクメン語 (チュルク諸語南西語群) の必要性 (拘束的モダリティ「～しなければならない」) を表す二つの形式 (1. 義務形 *V-mAll*¹, 2. *V-mAk(IIk) gerek* [V(erb stem)-VN necessary]) を取り扱う。義務形 *V-mAll* は認識的モダリティ (「～するにちがいない」) も表しうる (風間 2021: 468)。

まず、意味の観点での問題点を以下に挙げる。チュルク諸語全般の研究書である Johanson (2021: 705) は、トルコ語 (チュルク諸語南西語群) の義務形 *-mAll* の例を挙げて、*-mAll* が拘束的モダリティと認識的モダリティを表すことは認めながらも、その境界は曖昧であるとしている。その一方で、トルクメン語文法書では上記の二形式が拘束的モダリティを表すことに言及しているのに対して認識的モダリティを表すかどうかについては言及がない。

次に、形式の観点からの問題点を述べる。澤田 (1975) は日英の主観的助動詞 (例えば、英語の認識的モダリティを表す *may* 「かもしれない」、日本語の「だろう」) が、①否定形・過去形を持たない、②疑問化されない、③条件節に含めることができない、④*it/ so* によって文代名詞化できない、あるいは文代名詞「そう」の範囲に入らない、と指摘している。トルクメン語の二形式が認識的モダリティを表すのであれば、上記の①～④の制約について指摘されることも予想されるが、先行研究ではそのような制約に関する情報はない。

本稿では、母語話者への調査を通して、上記の意味と形式の問題点を解決することで、トルクメン語の必要性を表す二つの形式の差異を明らかにする。意味に注目した調査 (翻訳調査ならびに作例の許容度調査) では *V-mAll* は拘束的・認識的モダリティの両方を表せるが、*V-mAk(IIk) gerek* は認識的モダリティが表しにくいことを明らかにした。他方、形式に注目した調査 (作例の許容度調査) では、*V-mAk(IIk) gerek* は、動詞語幹に時制を表す要素が続かないことから、認識的モダリティを表さないことを明らかにした。以上から、本稿では、*V-mAk(IIk) gerek* は認識的モダリティを表せないが、*V-mAll* は認識的モダリティも表せる、と結論付ける。

本稿の構成は次のとおりである。2 節では先行研究を概観したのちに問題を提起し、3 節では母語話者への調査の結果を分析する。4 節では結論と今後の課題を述べる。なお、本稿における例文番号・日本語訳・グロス・例文中の装飾 (太字、下線) は筆者による。

2. 先行研究と問題提起

2.1 節でトルクメン語文法書における記述を概観し、2.2 節でモダリティの観点から問題

¹ 本稿では、母音調和による代表形を大文字で示す。*A* は *a, ä* に対応し、*I* は *i, ü, y, u* に対応する。

提起を行う。

2.1. トルクメン語文法書における記述

トルクメン語には、必要性 (拘束的モダリティ「～しなければならない」) を表す形式が二つ存在する。一つは義務形 *V-mAll* で、もう一つの形式は *V-mAk(IIk) gerek* [V-VN necessary] である。

まずは、義務形 *V-mAll* についてみる。トルクメン語では、基本的に動詞屈折接辞の後に、主語の人称・数に一致する接辞および接語が付くが、義務形 *V-mAll* には付かない。(1) では、主語が人称代名詞 *men* 「私」によって示されており、*et-meli* 「しなければならない」には何も付いていない。

(1) *Men bu iş-i et-meli.*

1SG this work-ACC do-OBLG

「私はこの仕事をしなければならない」 (Clark 1998: 294)

先行研究では *V-mAll* 自体に付く形式あるいは *V-mAll* の後に続く形式について言及があるので、ここで述べておく。否定は、Baskakov et al. (1970: 306-307), Clark (1998: 296²) によれば、*V-mAll* の後に否定小詞 *däl* を続けることで表される。この否定の表し方は、モダリティの否定と命題内容のいずれも意味することができる。(2) の *däl* は命題内容の必要性を否定して「必要はない」ことを表している。一方、(3) の *däl* は命題内容自体を否定して「しないことが必要である＝してはならない」を表している³。

(2) *Wagtlayyn hökümet-i hiç bir weç-den golla-maly däl!*

temporal government-ACC never one condition-ABL support-OBLG NEG

「臨時政府をいかなる状況からも支持する必要はない」 (Baskakov et al. 1970: 307)

(3) *Ol it-i bir minut=da ýaşa-t-maly däl.*

that dog-ACC one minute=EMPH live-CAUS-OBLG NEG

「その犬を一分も生かしてはならない。」 (Baskakov et al. 1970: 307)

疑問詞疑問文にも極性疑問文にも *V-mAll* は用いられる。(4) では、前半部に疑問詞 *näme* が用いられており、後半部には *V-mAll* に疑問 =*mi* が付されている。

² *V-mAll* は、動名詞 *-mA* と形容詞派生 *-II* 「～持ちの」との合成であり、形容詞派生 *-II* 「～持ちの」を *-sIz* 「～なしの」に置き換えることでも否定を表せる (Baskakov et al. 1970: 306, Clark 1998: 296)。ただし、この否定の表し方のほとんどは、形動詞として用いられる場合に見られる (Baskakov et al. 1970: 306)。

³ (2) と (3) の日本語訳は Baskakov et al. (1970: 307) による露訳(‘Не надо поддерживать Временное правительство ни в каком случае!’ と ‘Не дать жить этой собаке ни одной минуты.’) による。

- (4) *Indi men näme et-meli? Yzy-m-a öwrül-ip, salam ber-meli=mi?*
 now 1SG what do-OBLG back-1SG.POSS-DAT turn-CVB greeting give-OBLG=Q
 「今私は何をすべきか？振り返って挨拶すべきか？」(Clark 1998: 294)

過去は、Baskakov et al. (1970: 307-308), Clark (1998: 296) によれば、*V-mAll* に *=dI* (< 過去小詞 *idi*) を付けることで表される。(5) では、各文の *V-mAll* に *=dI* が付いて過去における必要性が表されている。

- (5) *Aýal-y kesellä äñet-meli=di, on edi ýaşan Akjagül-den*
 wife-3.POSS sick.person.DAT⁴ look.after-OBLG=PAST ten seven years PN-ABL
göz+gulak bol-maly=dy, on dört ýaşly Durdumyrad-a gara-maly=di.
 eye+ear be-OBLG=PAST ten four years PN-DAT look.after-OBLG=PAST
 「彼の妻は病人を世話しなければならなかった、17 歳のアキャギュルの世話をしなければならなかった、14 歳のドウルドゥムラドの世話をしなければならなかった。」
 (Baskakov et al. 1970: 308)

未来は、*V-mAll* に *bol-*「なる、である」の不確定未来形 *bol-ar* を続けることで表される (Clark 1998: 296)。(6) では、*gel-meli*「来なければならぬ」のあとに、*bol-ar=syň*「君は～でしょう」が続いている。(7) では、*öýlen-dir-meli*「結婚させなければならぬ」のあとに、*bol-ar*「(誰かが)～でしょう」が続いている。

- (6) *Her niçik bol-sa=da gel-meli bol-ar=syň.*
 every how be-COND=even come-OBLG be-FUT=2SG
 「どうであっても、君は来なければならぬでしょう。」(Clark 1998: 295)

- (7) *Ony öýlen-dir-meli bol-ar, ...*
 3SG.ACC merry-CAUS-OBLG be-FUT
 「彼を結婚させなければならぬでしょう…」(Clark 1998: 295)

仮定は、*V-mAll* に *bol-*「なる、である」の条件形 *bol-sa* を続けることで表される (Clark 1998: 296)。(8) では、*bar-maly*「行かなければならぬ」のあとに、*bol-sa*「ならば」が続いている。

- (8) *Eger bar-maly bol-sa, til kak-ar=syň.*
 if go-OBLG be-COND tongue wave-FUT=2SG

⁴ この語は、*keselli*「病人」に 与格 *-e* が付いていると分析でき、名詞語幹末尾の母音 *i* と与格接尾辞 *-e* が融合して *ä /ä:/* となっている。

「もし (彼女が) 行かなければならないなら、君は電話をするだろう。」

(Clark 1998: 296)

さらに、*V-mAll* に疑問の *=mi* 「～か」、確認の *=dlr* 「～よね」、証拠性の *eken* 「～ようだ」も後続させることが可能だという (Baskakov et al. 1970: 307-308)。なお、Baskakov et al. (1970), Clark (1998) には、義務形 *V-mAll* の動詞語幹 *V* に何らかの接辞を続けて否定・時制・仮定を表せるかどうかについて言及はない。

ちなみに、*V-mAll* は形動詞としても機能するが、本稿での議論に直接関わらないため、これ以降取り扱わない。(9) では、*bejer-meli* 「修理すべき」が *kätmen-iñiz* 「あなたの鍬」を修飾している。

- (9) *Ene bejer-meli kätmen-iñiz bar bol-sa, getir-i+ber, men*
again repair-PTCP.OBLG hoe-2PL.POSS existent be-COND bring-CVB+give 1SG
bejer-ip ber-er-in.
repair-CVB give-FUT-1SG

「また修理すべき鍬があれば、持ってきてくれ、私が直す。」(Baskakov et al. 1970: 306)

もう一つの必要性を表す形式は *V-mAk(ilk) gerek* [V-VN necessary] である (Baskakov et al. 1970: 305-308, Clark 1998: 306-307)。Clark (1998: 306) は *V-mAk gerek* は *V-mAk(ilk) gerek* に等しいと述べ⁵、*V-mAk* に主語の数・人称に一致する所有人称接辞が付くと述べている。

- (10) *Galla biz-in öz-ümüz-inki: ony hökman payla-ş-mag-ymyz*
grain 1PL-GEN own-1PL.POSS-thing 3SG.ACC definitely share-RECP-VN-1PL.POSS
gerek!
necessary

「穀物は我々自身のものである：それをきっぱりと分け合わなければならない！」

(Clark 1998: 307)

しかし、*V-mAll* のように、それ自体に付く形式あるいは後に続く形式についての記述はなく、*V-mAk(ilk)* の動詞語幹 *V* に何らかの接辞を続けられるかどうかについても記述がない。

2.2. モダリティの観点からの先行研究の概観と問題提起

2.2.1 節では、トルクメン語の必要性を表す二つの表現 *V-mAll* と *V-mAk(ilk) gerek* に関わる、拘束的モダリティと認識的モダリティについての記述を概観する。2.2.2 節では、日英の認識的モダリティを表す助動詞に関して「主観性」と「客観性」の観点から分析を行った

⁵ Karakoç (2022: 267) は、*-ilk* は名詞から異なる種類の名詞を派生すると述べ、次の例を挙げている：*çagalyk* 「子供時代」(*çaga* 「子供」)、*söz-lük* 「辞書」(*söz* 「言葉」)、*aýlyk* 「給料」(*aý* 「月」)。

澤田 (1975) を概観する。第 1 節でも述べたように、澤田 (1975) が日本語と英語において提示した認識的モダリティ形式の制約は、トルクメン語に関する調査でも参照できると考えるためである。最後に、2.2.3 節で問題提起を行う。

2.2.1. 拘束的モダリティと認識的モダリティ

Johanson (2021: 705) は拘束的モダリティと認識的モダリティとの境界は曖昧であるとし、トルコ語 (チュルク諸語南西語群) *-mAll* の例 (11) を挙げて、その曖昧性について説明している。(11) は、二つの読みが可能であり、英訳に示されているように、「アリは寝なければならない＝アリにとって必要な (正しい) 行動は寝ることだ」という拘束的モダリティの読みも、「アリは寝ているに違いない＝アリが寝ていると結論付けなければならない」という認識的モダリティの読みも、どちらも可能である、という。

(11) *Ali uyu-malı.*

PN sleep-OBLG

‘Ali has to sleep.’ = ‘The necessary (correct) action for Ali is to sleep’

‘Ali is most likely to sleep’ = ‘It is necessary to conclude that Ali is asleep’

(Johanson 2021: 705)

風間 (2021: 468) では、トルクメン語の *V-mAll* が認識的モダリティを表していると考えられる例 (12) が挙げられている。この例では、形動詞過去 (*maşyn döw-ül-en* 「車が壊れた」) に *bol-* 「である、になる」の義務形 *V-mAll* が続いている⁶。

(12) *Olar entek gel-enok, ýol-da maşyn döw-ül-en bol-maly.*

3PL yet come-NEG.PRS way-LOC car break-PASS-PTCP.PAST be-OBLG

「彼らはまだ来ないなんて、きっと途中で車が壊れたんじゃないか。」(風間 2021: 468)

他方、2.1 節に挙げたトルクメン語文法書の記述からは *V-mAk(ilk) gerek* が認識的モダリティを表せるかどうかについては明確な記述がない。

2.2.2. 認識的モダリティを表す日英「主観的」助動詞の分析

澤田 (1975) は、日英の「主観的」助動詞の持つ統語的・意味的な制約を検討し、基底構造において三つの層を仮定することで、それらの制約が日英の主観的助動詞に統一的に適用される、としている。

澤田 (1975: 75) は、(13) を例に主観的表現と客観的表現について説明している。

(13) a. *Probably* Hamlet *will* kill his uncle, *won't* he?

b. たぶん、ハムレットはおじを殺すだろう ね。

⁶ この場合、形動詞に *bol-* を続けることで、命題内容に関わる時制が表されている。

これらの例はどちらも表現概念上、《ある概念》+《話者の判断》+《話者から聴者への念押し》という組み立てを持っている。《ある概念》に相当する部分、つまり (13a) の “Hamlet kill(s) his uncle”、(13b) の「ハムレットはおじを殺す」は、それ自体が真偽の判定が可能な 1 個の *proposition* を構成している。一方、《話者の判断》、《話者から聴者への念押し》に相当する (13a) の “probably will”, “won’t he” と、(13b) の「だろう」「ね」といった話者の内面に関係する部分は、真偽の判定は不可能であるため、*non-proposition* である。*proposition* が話者から独立した「客観的」表現に属するとすれば、*non-proposition* は話者に依存した「主観的」表現に属すると言える。

澤田 (1975: 93-94) は、英語の主観的助動詞を含む文の構造が *performative S*, *epistemic S*, *propositional S* の三つの階層を持つと分析している⁷。例えば、(14) は、図 1 のように三層に分かれた基底構造を持つと分析し、(14a) の *will probably*、b. の *I suppose/predict* は、図 1 における *epistemic S* の表現形式だと想定している。なお、(14) 末尾の (E) は、各文が *Epistemic* な読みであることを示している。

(14) a. Falstaff *will probably* have drunk so much last night. (E)

b. *I suppose/predict* Falstaff drank so much last night. (E)

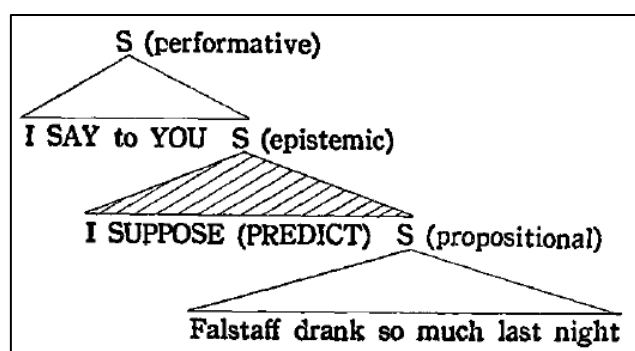


図 1: (14) の基底構造 (澤田 1975: 93)

澤田 (1975: 83-90) は英語の主観的助動詞 (下記の表 1 にある *Epistemic*) が表 1 の制約に従うと分析し、これらの諸制約は、ひとえに図 1 における *epistemic S* の制約 (特性) に由来するとしている。例えば、英語の認識的モダリティを表す *may* 「かもしれない」は、①否定形・過去形を持たない、②疑問化されない、③条件節に含めることができない⁸、④文代名詞化 *it/so* の範囲に入らない⁹、と分析している。

⁷ 澤田 (1975: 79-80) は、Kajita (1968: 43-110) による英語における文の階層性を取り上げた上で、Kajita (1968) による階層は「主観的表現」「客観的表現」という観点から更なる精緻化が必要である、と述べている。

⁸ 英語において認識的モダリティを表す法助動詞が *if, when, until* などに導かれた時／条件の副詞節に含まれないことは、Jenkins (1972) が詳しく論じている。

⁹ 認識的モダリティを表す主観的法助動詞が使われた文、例えば John said, “Newton *may/must/will/should* have

表 1: 英語の主観的助動詞の持つ制約¹⁰

表現性 文の位相 制 約	主 観		客 観
	Performative	Epistemic	Propositional
否定形にならない	+	+	—
過去形にならない	+	+	—
疑問形にならない	+	+	—
S に支配されない	+	— (時・条件の S)	—
文代名詞化の 範囲に入らない	+	+	—

(澤田 1975: 94)

澤田 (1975: 99-100) は、日本語の主観的助動詞の構造にも表 1 の制約が適用できるという。例えば、日本語の「だろう」をその例として挙げている (澤田 1975: 96-99¹¹)。

日本語の主観的助動詞の構造にも表 1 の制約が適用できることから、英語の主観的動詞に見られた図 1 の基底構造を想定することができる (澤田 1975: 100)。例えば、(15) には、(16) あるいは図 2 の基底構造が仮定される。

(15) たぶん、昨夜フォルスタッフは大酒を飲んだだろうね。(澤田 1975: 99)

(16) [[昨夜、フォルスタッフは大酒を飲んだ]_s [私は判断する]_s [私は君に言う]_s]_s]_s

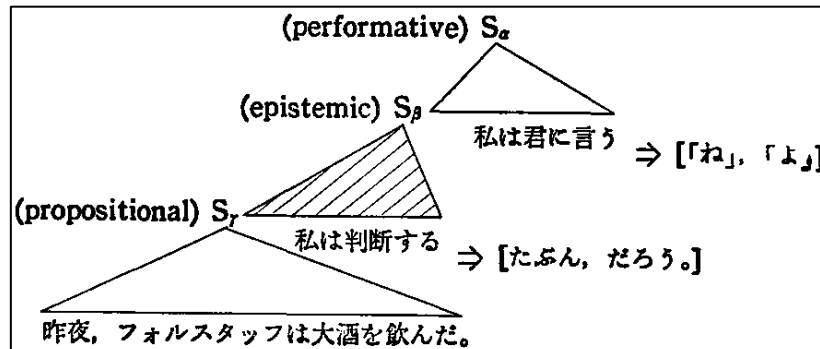


図 2: (15) の基底構造 (澤田 1975: 100)

discovered the law of gravitation,” but I didn’t admit it. の it が指す範囲は、法助動詞が表すモダリティを除いた部分である Newton have discovered the law of gravitation であると感じられる、と澤田 (1975: 90) は述べている。

¹⁰ Coates (1983) は、表 1 に挙げた制約に類似した「認識的モダリティ不可侵性の原理」を提唱した。この原理は、英語の認識的モダリティを表す法助動詞において、否定・過去・条件が主陳述 (main predication; 本稿で言う「命題内容」) のみに作用するという原理である。

¹¹ 「だろう」に「か」を付けることはできる。しかし、澤田 (1975: 98) は、「だろうか」は、相手への働きかけではなく、自問自答で用いられるため、疑問形にならない、と述べている。

以上の分析により、英語の主観的助動詞に対する制約が日本語の主観的助動詞にもほぼそのまま適用できることが明らかとなった。したがって、言語の種類が異なっている、両言語の間には、等しく主観と客観という表現性に応じた文構造上の階層性の違いが見られると言える (澤田 1975: 99)。

本稿では、トルクメン語の認識的モダリティを表す表現にも、日英の主観的助動詞に適用された制約 (表 1) が適用可能であるという想定で調査を行う。以上で参照してきた澤田 (1975) の議論のように、言語の種類が異なる日英の主観的助動詞=認識的モダリティを表す助動詞に同じ制約が適される。したがって、(12) に示したように、認識的モダリティも表すトルクメン語の義務形 *V-mAll* にも、表 1 に示した制約が適用されると予想される。

2.2.3. 問題提起

2.2.1 節では、トルクメン語の *V-mAll* が認識的モダリティを表している例 (12) を挙げたが、*V-mAk(IIk) gerek* が認識的モダリティを表せるかどうかについて明確な記述がない、と述べた。*V-mAk(IIk) gerek* が認識的モダリティを表せるかどうかを明らかにするために、本稿では、第一に、モダリティの意味に注目し、拘束的モダリティを表す形式は「～しなければならない」、認識的モダリティを表す形式は「～にちがいない／～はずだ」のように、両モダリティ形式が異なる日本語を媒介にして翻訳調査を行い、両形式が認識的モダリティを表すか否かを確かめる。

さらに、拘束的モダリティについては、必要性が参与者自身にある参与者内必要性と参与者以外にある参与者外必要性の使い分けがあるのかどうかの検証も必要である (Van der Auwera and Plungian 1998: 80)。参与者内必要性とは、事態に関与する参与者の内部にある必要性を指す (例えば、*Boris needs to sleep ten hours every night for him to function properly*. 「ボリスがちゃんと機能するには毎晩 10 時間寝ることが必要である。」 (Van der Auwera and Plungian 1998: 80))。一方、参与者外必要性とは、その状態に関与している参与者の外部にあり、この状態を必要としている状況を指す (例えば、*To get to the station, you have to take bus 66*. 「駅に行くには 66 番のバスに乗らなければならない。」 (Van der Auwera and Plungian 1998: 80))。

2.2.2 節では、日英の主観的助動詞の持つ統語的・意味的な制約を検討した澤田 (1975) を取り上げた。具体的には、日英の主観的助動詞 (例えば、英語の認識的モダリティを表す *may* 「かもしれない」、日本語の「だろう」) が否定形・過去形を持たず、疑問化されず、条件節にも含むことができず、*it/ so* によって文代名詞化できない、あるいは文代名詞「そう」の範囲に入らない、と分析している。詳しくは表 1 を参照されたい。

本稿では、澤田 (1975) で提示された制約がトルクメン語においても適用可能であるとする。言語の種類が異なる日英の主観的助動詞=認識的モダリティを表す助動詞に同じ制約が適用されるのであれば、トルクメン語の認識的モダリティを表す形式にも同様の制約が適用される可能性がある。その想定を正しいとすると、*V-mAll* と *V-mAk(IIk) gerek* が認識的モダリティを表すのであれば、両者には否定形・過去形がないこと、両者は疑問文や条件節に含まれないこと、文代名詞の範囲には入らないことが予想される。2.1 節に挙げたトルクメン語の先行研究では、*V-mAll* についてはそれ自体に付く形式あるいは *V-mAll* の後に続く

形式の言及はあった。否定 ((2), (3))・疑問 (4)・仮定 (8) の例を挙げた。ただし、これらはいずれも拘束的モダリティを表している例である。*V-mAll* が認識的モダリティを表している例は、上記の (12) を参照されたい。(12) では命題内容が過去を表している。一方、*V-mAk(IIk) gerek* についてはそのような記述は見られない。したがって、*V-mAll* と *V-mAk(IIk) gerek* の動詞語幹 *V* に否定・過去を表す要素を付して、母語話者にそれが許容されるかどうかについても調査する必要がある。

3. 調査

上記 2.2.3 節で提起された二つの問題点を次に再び整理して提示する。具体的には、① *V-mAk(IIk) gerek* が認識的モダリティを表せるかどうか、拘束的モダリティに使い分けがあるのかという点、② *V-mAll* と *V-mAk(IIk) gerek* の動詞語幹 *V* に否定・過去を表す要素を付して、母語話者にそれが許容されるかどうかという点である。

本節では、二種類の調査を行い、上記の二つの問題点を解決することを目指す。二種類の調査とは、①に対応した調査 (意味に注目した調査) と、②に対応した調査 (形式に注目した調査) である。前者については 3.1 節で、後者については 3.2 節で、それぞれ調査の方法と結果を示す。なお、調査協力者はトルクメン語母語話者二名で、一名は 1991 年マリ州出身の男性 (以後、話者 A とする)、もう一名は 1993 年バルカン州出身の女性 (以後、話者 B とする) である。

3.1. 意味に注目した調査—翻訳調査と作例の許容度調査

まず、インフォーマントに以下の 3 文 (参与者内必要性 (17)、参与者外必要性 (18)、認識的モダリティ (19)) のトルクメン語への翻訳を依頼した。ここでは、話者 A の翻訳を記す¹²。(17) と (18) は、最初に a. の *V-mAll* で翻訳された。発表者が *V-mAll* を *V-mAk(IIk) gerek* に入れ替えた文である b. の許容度をインフォーマントに尋ねたところ、どれも許容された。

(17) 参与者内必要性 「よく働くためには、ベゲンチは毎日 8 時間寝なければならない。」

a. *Gowy işle-mek, Begenç her gün 8 sagat yat-maly.*

good work-VN PN every day hour lie-OBLG

b. *Gowy işle-mek, Begenç her gün 8 sagat yat-mag-y gerek.*

good work-VN PN every day hour lie-VN-3.POSS necessary

¹² (17) と (18) の翻訳にあたり、話者 A・B とともに *V-mAll* を用いたという点では一致しているが、両者の翻訳の間には細かな差異がある。例えば、話者 B は、(17) 「よく働くためには、」を *Gowy işlemek için*, [good work-VN for] と訳し、(19) 「家に帰るに違いない」を *öý-e gayt-jak=myka diy-yär-in*, [home-DAT return-FUT=DUB say-NPST-1SG] と訳した。Clark (1998: 464) によれば、疑いを表す小詞 *=myka* に *diy-* 「言う」を続けることで、推測あるいは仮説が表されるという。

(18) 参与者外必要性「夜遅くなったので、ベゲンチは家に帰らなければならない。」

- a. *Giç bol-dy, Begeñ öý-e gayt-maly.*
late become-PAST PN home-DAT return-OBLG
- b. *Giç bol-dy, Begeñ öý-e gayt-mag-y gerek.*
late become-PAST PN home-DAT return-VN-3.POSS necessary

(19) は、*V-mAll* にも *V-mAk(IIk) gerek* にも翻訳されなかった。

(19) 認識的モダリティ「ベゲンチはカバンに物を入れているので、今すぐ家に帰るに違いない。」

Begeñ sumka-sy-na zat-lar-y-ny sal-yp otur-andyg-y üçin,
PN bag-3.POSS-DAT thing-PL-3.POSS-ACC put-CVB sit-PTCP.PAST-3.POSS for

basym öý-e gayt-jag-y belli.
soon home-DAT return-PTCP.FUT-3.POSS certain

上記の認識的モダリティの例 (19) で *V-mAll* と *V-mAk(IIk) gerek* に翻訳されなかったため、両形式を用いて「雨が {(これから) 降る (20) / (今) 降っている (21) / (昨日) 降った (22)} に違いない」を筆者が作例し、その許容度を尋ねた。調査文の命題内容を「雨が降る」としたのは、主語や話し手の意志が関わらない命題にすれば、認識的モダリティの読みしか許さないと予想したためである。その結果、(20), (21), (22) 全ての例において、A, B 両インフォーマントともに、*V-mAll* の例を許容したが、*V-mAk(IIk) gerek* の例は不自然に感じるとコメントした。

(20) では、話者 A は a-1. の動詞語幹に直接 *-maly* が付く例を許容したものの、話者 B は a-1. を許容しなかった。そこで、筆者が (12) を参考にして未来形動詞の後に *bol-maly* を続けた作例 (a-2.) を提示したところ、これを許容した。

- (20) a-1. *Ertir ýagyş ýag-maly.*
tomorrow rain rain-OBLG
- a-2. *Ertir ýagyş ýag-jak bol-maly.*
tomorrow rain rain-PTCP.FUT be-OBLG
- b. ? *Ertir ýagyş ýag-mag-y gerek.*
tomorrow rain rain-VN-3.POSS necessary
- 「明日、雨が降るに違いない。」

筆者が現在形動詞の後に *bol-maly* を続けた作例 (21a) を提示したところ、二名ともこれを許容した。

- (21) a. *Daşar-da ýagyş ýag-ýan bol-maly*
 outside-LOC rain rain-PTCP.PRS be-OBLG
- b. ? *Daşar-da ýagyş ýag-ýan bol-mag-y gerek.*
 outside-LOC rain rain-PTCP.PRS be-VN-3.POSS necessary
 「外で雨が降っているに違いない。」

筆者が過去形動詞の後に *bol-maly* を続けた作例 (22a) を提示したところ、二名ともこれを許容した。

- (22) a. *Düýn ýagyş ýag-an bol-maly.*
 yesterday rain rain-PTCP.PAST be-OBLG
- b. ? *Düýn ýagyş ýag-an bol-mag-y gerek.*
 yesterday rain rain-PTCP.PAST be-VN-3.POSS necessary
 「昨日、雨が降ったに違いない。」

(17) と (18) および (20) から (22) までの結果から、*V-mAll* は拘束的・認識的モダリティの両方を表せることが明らかとなった。一方で、(20) から (22) の結果から、*V-mAk(IIk)* *gerek* は認識的モダリティを表しにくいことが明らかとなった。

3.2. 形式に注目した調査—作例の許容度調査

まず、*V-mAll* と *V-mAk(IIk)* *gerek* について *Begenç öýe git-* 「ベゲンチが家に行く」という主陳述をもとにして下記 10 パターンの用例を作例し、計 20 の例文を用意した。この 10 パターンは、2.1 節と 2.2 節で示した先行研究における記述あるいは例をもとにしている。モダリティに後続する例・動詞語幹に付く例・仮定形の例・疑問形の例はトルクメン語に関わる先行研究の記述 (2.1 節) と澤田 (1975) の記述 (2.2 節) をもとにしており、確認・証拠性の例はトルクメン語に関わる先行研究の記述 (2.1 節) をもとにしている。なお、文代名詞の範囲に入るかどうかという点については、今回の調査方法 (翻訳調査と作例の許容度調査) になじまないため対象外とする。

- モダリティに後続する (モダリティに時制・否定が作用する) 例 3 例 (過去 1 例, 未来 1 例; (6); Clark 1998: 296、否定 1 例)
- 動詞語幹に付く (命題内容に時制・否定が作用する) 例 3 例 (過去 1 例; (12); 風間 2021: 468, 未来 1 例、否定 1 例)
- 仮定形 1 例 ((8); Clark 1998: 296)
- 疑問形 1 例 (Baskakov et al. 1970: 307-308)
- 確認 =*dIr* を後続させた例 1 例 (Baskakov et al. 1970: 307-308)
- 証拠性 *eken* を後続させた例 1 例 (Baskakov et al. 1970: 307-308)

表 1 に調査結果を挙げる。二名とも判断結果は同じであった。二列目 *-mAll* と三列目 *-mAk(IIk) gerek* の各セル内 (一行目を除く) には、調査で用いた文の動詞部分・そのグロスを挙げる。

表 2: 作例許容度調査の結果一覧

		<i>V-mAll</i>	<i>V-mAk(IIk) gerek</i>
モダリティ に後続する	過去	<i>git-meli bol-dy</i> [leave-OBLG be-PAST]	<i>git-meg-i gerek bol-dy</i> [leave-VN-3.POSS necessary be-PAST]
	未来	<i>git-meli bol-ar</i> [leave-OBLG be-FUT]	<i>git-meg-i gerek bol-ar</i> [leave-VN-3.POSS necessary be-FUT]
	否定	<i>git-meli däl</i> [leave-OBLG NEG]	<i>git-meg-i gerek däl</i> [leave-VN-3.POSS necessary NEG]
動詞語幹 に付く	過去	<i>gid-en bol-maly</i> [leave-PTCP.PAST be-OBLG]	<i>*gid-en bol-mag-y gerek</i> [leave-PTCP.PAST be-VN-3.POSS necessary]
	未来	<i>git-jek bol-maly</i> [leave-PTCP.FUT be-OBLG]	<i>*git-jek bol-mag-y gerek</i> [leave-PTCP.FUT be-VN-3.POSS necessary]
	否定	<i>*git-me-meli</i> [leave-NEG-OBLG]	<i>git-mezlig-i gerek</i> [leave-VN.NEG-3.POSS necessary]
仮定形 「～ならば」		<i>git-meli bol-sa,</i> [leave-OBLG be-COND]	<i>git-meg-i gerek bol-sa,</i> [leave-VN-3.POSS necessary be-COND]
疑問形 「～か」		<i>git-meli=mi</i> [leave-OBLG=Q]	<i>git-meg-i gerek=mi</i> [leave-VN-3.POSS necessary=Q]
確認 = <i>dIr</i> 「～よね」		<i>git-meli=dir</i> [leave-OBLG=CONF]	<i>git-meg-i gerek=dir</i> [leave-VN-3.POSS necessary=CONF]
証拠性 <i>eken</i> 「～ようだ」		<i>git-meli eken</i> [leave-OBLG EVID]	<i>git-megi gerek eken</i> [leave-VN-3.POSS necessary EVID]

以下では、調査結果に顕著な違いが見られた箇所について例を挙げ、澤田 (1975) の提示した制約がかかると予想されるが制約がかからなかった箇所 (仮定形、疑問形) について議論する。

まず、調査結果に顕著な違いが見られた箇所について例を挙げる。過去、未来、否定の順に例を挙げる。過去と未来の場合、*V-mAll* は許容されるが、*V-mAk(IIk) gerek* は許容されない。(23) は、動詞語幹に過去を表す要素が続く例である。a. では、*gid*-「行く、去る」に過去形動詞 *-en* が続き、そのあとに *bol*-「である」に義務形 *V-maly* を続けることで、命題内容が過去であったことを表している。したがって、a. は認識的モダリティを表していると言える (日本語訳は話者 A による)。2.2.1 節で、(12) を挙げたが、これも同じように、動詞

語幹に過去形動詞が続き、その後に *bol-maly* が続く例であり、認識的モダリティを表している。b. は、a. とほぼ同じ要素から成るが、*bol-* に続くのが *-mag-y gerek* となっており、非文と判断された。

(23) a. *Begenç öý-e gid-en bol-maly.*

PN house-DAT leave-PTCP.PAST be-OBLG

「ベゲンチは家に帰ったはずだ。」

b. **Begenç öý-e gid-en bol-mag-y gerek.*

PN house-DAT leave-PTCP.PAST be-VN-3.POSS necessary

(24) は動詞語幹に未来を表す要素が続く例である。a. では、*gid-*「行く、去る」に未来形動詞 *-jek* が続き、そのあとに *bol-*「である」の義務形 *-maly* を続けることで、命題内容が未来であることが表されている。したがって、a. は認識的モダリティを表していると言える（日本語訳は話者 A による）。b. は、a. とほぼ同じ要素から成るが、*bol-* に続くのが *-mag-y gerek* となっており、非文と判断された。

(24) a. *Begenç öý-e git-jek bol-maly.*

PN house-DAT leave-PTCP.FUT be-OBLG

「ベゲンチは家に行くに違いない。」

b. **Begenç öý-e git-jek bol-mag-y gerek.*

PN house-DAT leave-PTCP.FUT be-VN-3.POSS necessary

以上から、*V-mAll* は、命題内容に時制が作用し認識的モダリティを表せるが、*V-mAk(lik) gerek* は、命題内容に時制が作用せず認識的モダリティを表せない、ということが明らかとなった。

次に、動詞語幹に否定を表す要素が続く例 (25) について述べる。a. の *V-mA-mAll* の例が非文だとされたが、これは、(2) と (3) で示したように、*V-mAll* のあとに否定小詞 *däl* を続けることで命題内容の否定もモダリティの否定も表せるためであろう。ただし、これは *V-mAk(lik) gerek* には当てはまらない。動詞語幹に否定要素を付けること (25b) も、モダリティ要素の後に否定 *däl* を続けることも可能である。

(25) a. **Begenç öý-e git-me-meli.*

PN house-DAT be-NEG-OBLG

b. *Begenç öý-e git-mezlig-i gerek*

PN house-DAT leave-VN.NEG-3.POSS necessary

「ベゲンチは家に行くべきではない。」

なお、(25b) は「ベゲンチは家に行かないに違いない」という読みはできないと話者 A から

コメントを得た。

最後に、澤田 (1975) の提示した制約がかかると予想されるが制約がかからなかった箇所について議論する。澤田 (1975) では、日英の主観的助動詞は仮定形にも疑問形にもならないと述べられていた。しかし、表 2 に示された調査結果を見ると、*V-mAll* も *V-mAk(IIk) gerek* も仮定形にも疑問形にもなることができる。これは、それぞれの作例が拘束的モダリティを表す例として読まれたためだと考えられる。2.1 節では、*V-mAll* も *V-mAk(IIk) gerek* も拘束的モダリティである必要性「でなければならない」を表すことを示した。

4. 結論と今後の課題

3.1 節の意味に注目した調査では、下記の (20)~(22) の b. に示したように、*V-mAll* は拘束的・認識的モダリティの両方を表せるが、*V-mAk(IIk) gerek* は認識的モダリティが表しにくいことが明らかとなった。

- (20) a-1. *Ertir* *ýagyş* *ýag-maly.*
 tomorrow rain rain-OBLG
 a-2. *Ertir* *ýagyş* *ýag-jak* *bol-maly.*
 tomorrow rain rain-PTCP.FUT be-OBLG
 b. ? *Ertir* *ýagyş* *ýag-mag-y* *gerek.*
 tomorrow rain rain-VN-3.POSS necessary
 「明日、雨が降るに違いない。」(再掲)

- (21) a. *Daşar-da* *ýagyş* *ýag-ýan* *bol-maly*
 outside-LOC rain rain-PTCP.PRS rain-OBLG
 b. ? *Daşarda* *ýagyş* *ýag-ýan* *bol-mag-y* *gerek.*
 outside-LOC rain rain-PTCP.PRS rain-VN-3.POSS necessary
 「外で雨が降っているに違いない。」(再掲)

- (22) a. *Düýn* *ýagyş* *ýag-an* *bol-maly.*
 yesterday rain rain-PTCP.PAST rain-OBLG
 b. ? *Düýn* *ýagyş* *ýag-an* *bol-mag-y* *gerek.*
 yesterday rain rain-PTCP.PAST rain-VN-3.POSS necessary
 「昨日、雨が降ったに違いない。」(再掲)

3.2 節の形式に着目した調査で *V-mAll* と *V-mAk(IIk) gerek* の間に最も顕著な差異が現れた点として、*V-mAll* の前に過去を表す要素を置いた文、すなわち命題内容に時制が作用している文は許容されたが、*V-mAk(IIk) gerek* ではそのような文は許容されなかったことが挙げられる。(23)と (24) は *gerek* の前に過去を表す要素を置いた文、すなわち命題内容に時制

が作用している文である。

- (23) a. *Begenç öý-e gid-en bol-maly.*

PN house-DAT leave-PTCP.PAST be-OBLG

「ベゲンチは家に帰ったはずだ。」(再掲)

- b. **Begenç öý-e gid-en bol-mag-y gerek.*

PN house-DAT leave-PTCP.PAST be-VN-3.POSS necessary

- (24) a. *Begenç öý-e git-jek bol-maly.*

PN house-DAT leave-PTCP.FUT be-OBLG

「ベゲンチは家に行くに違いない。」(再掲)

- b. **Begenç öý-e git-jek bol-mag-y gerek.*

PN house-DAT leave-PTCP.FUT be-VN-3.POSS necessary

以上により、*V-mAk(IIk) gerek* の表す命題内容には時制が作用しないことが明らかとなった。2.2.2 節で挙げた澤田 (1975) によれば、日英の認識的モダリティを表す主観的助動詞では、過去形を持たず、疑問化されず、条件節にも含むことができず、文代名詞の範囲に入らない、という制約を持つ。本稿は、2.2.2 節で述べたように、この制約をトルクメン語にも援用できるという想定のもと分析を進めた。この想定のもとでは、*V-mAk(IIk) gerek* は、動詞語幹に時制を表す要素が続かない、つまり命題内容に時制が作用しないことから、認識的モダリティを表さないと予想できる。この想定は、(25) の b. に示したように、動詞語幹に否定を表す要素が付く場合に認識的モダリティを表さないことから裏付けられる。

- (25) b. *Begenç öý-e git-mezlig-i gerek*

PN house-DAT leave-VN.NEG-3.POSS necessary

「ベゲンチは家に行くべきではない。」(再掲)

[*ベゲンチは家に行かないに違いない。]

以上の分析により、本稿は、*V-mAk(IIk) gerek* は拘束的モダリティを表すが認識的モダリティを表せない一方、*V-mAll* は拘束的モダリティも認識的モダリティもどちらとも表せると結論付ける。

今後は、トルクメン語と同じ南西 (オグズ) 語群に属するトルコ語・アゼルバイジャン語と、中央アジアのチュルク諸語における必要性を表す形式と比較対照を行いたい。トルコ語・アゼルバイジャン語では、トルクメン語と同源の *V-mAll* を持つ¹³。他方、中央アジア

¹³ Rentzsch (2015: 139) では、西オグズの言語 (トルコ語・アゼルバイジャン語) の *V-mAll* は、アスペクトとムードの作用域に入らず、意味論の観点からは、直示的に中心的意識を持つ主体の観点から当該動作を行う必要性や義務を評価する願望法 -GAy と -(y)A に似ている、と指摘されている。一方、トルクメン

のチュルク諸語では、*V-mAll* は用いられないが、古チュルク語 *VN+kergek に遡る構造 (トルクメン語の *V-mAk(IIk) gerek* に相当) が拘束的モダリティも認識的モダリティも表す (日高 2023: 123-124, 127-128)。この比較対照により、チュルク諸語における必要性を表す形式の意味の通時的変遷を推定することができると考えている。

謝辞

本稿は、北方言語学会第 7 回大会 (室蘭工業大学+オンライン (Zoom ミーティング), 2024/9/22) で発表した内容に大きく加筆修正したものである。筆者の発表を聴いてくださった方々、質疑応答にてコメントをくださった方々に深く感謝申し上げます。また、本稿での調査は、トルクメン語母語話者二名の方からの協力を得て成しえたものである。ここに深い感謝の意を表する。匿名の二名の査読者にも御礼を申し上げます。むろん、本稿での誤りは、すべて筆者に帰するものである。なお、本稿は、JSPS 科研費 JP22H00657, JP22KJ1443 の助成を受けている。

略号一覧

+		複合語境界	NEG	negative	否定
=		接語境界	NPST	non-past	非過去
-		接辞境界	OBLG	obligation	義務
1, 2, 3		123 人称	PASS	passive	受身
ABL	ablative	奪格	PAST	past	過去
ACC	accusative	対格	PL	plural	複数
CAUS	causative	使役	PN	person name	人名
COND	conditional	条件	POSS	possession	所有
CVB	converb	副動詞	PRS	present	現在
DAT	dative	与格	PTCP	participle	形動詞
DUB	dubitative	疑念	Q	question macker	疑問標識
EMPH	emphatic	強調	RECP	reciprocal	相互
FUT	future	未来	SG	singular	単数
GEN	genitive	属格	VN	verbal noun	動名詞
LOC	locative	処格			

参考文献

Baskakov, N. A., M. Ja. Xamzaev and B. Čaryjarov. (1970) *Grammatika Turkmenskogo jazyka. část' I. fonetika i morfologija*. [Turkmen Grammar. Volume I. Phonology and Morphology.] Aşxabad:

語 *V-mAll* は、それだけで現れることも、*bol-*を用いてアスペクトとムードの接辞を受け入れることもできる。また、Mansuroğlu (1959: 173) は、14~15 世紀のアナトリア・トルコ語の *V-mAll ol-* の用例を挙げている (トルコ語の *ol-* はトルクメン語の *bol-* に相当する)。これは、古くはトルコ語でも、トルクメン語と同じように、*V-mAll* のあとに *bol-* を続けられたことを示している。

Izdatel'stvo «YLYM».

Clark, Larry (1998) *Turkmen reference grammar*. Wiesbaden: Harrassowitz.

Coates, Jennifer. (1983) *The Semantics of Modal Auxiliaries*. London: Croom Helm.

日高晋介 (2023) 「中央アジアのチュルク諸語におけるモダリティ対照の試み」『言語の普遍性と個別性』14: 109-135.

Jenkins, Lyle. (1972) *Modality in English Syntax*. Doctoral dissertation, MIT. [Reproduced by Indiana University Linguistics Club.]

Johanson, Lars. (2021) *Turkic*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kajita, Masaru. (1967) *A Generative-Transformational Study of Semi-Auxiliaries in Present-Day American English*. Tokyo: Sansei-do Book Store, Ltd.

Karakoç, Birsal (2022) Turkmen. Johanson, Lars and Éva Á. Csató (eds.) *The Turkic Languages*. 262-286. New York: Routledge.

風間伸次郎 (2021) 「トルクメン語：特集補遺データ『他動性』『ヴォイスとその周辺』『受動表現』『アスペクト』『モダリティ』『情報構造の諸要素』『否定、形容詞と連体修飾複文』『所有・存在表現』『語学研究所論集』26: 439-99.

Mansuroğlu, Mecdut. (1959) Das Altosmanische [Old Ottoman]. Deny, Jean, Kaare Grønbech, Helmuth Scheel and Zeki Velidi Togan (eds.). *Philologiae Turcicae Fundamenta. Vol. 1*. Wiesbaden: Steiner. 161-182.

Rentsch, Julian (2015) *Modality in the Turkic languages: form and meaning from a historical and comparative perspective*. Berlin: Klaus Schwarz Verlag.

澤田治美 (1975) 「日英語主観的助動詞の構文論的考察」『言語研究』68: 75-103.

Van der Auwera, Johan and Vladimir A. Plungian. (1998) Modality's Semantic Map. *Linguistic Typology*. 2(1):79-124.

A Study of Two Forms Expressing “necessity” in Turkmen

Shinsuke HIDAKA
(University of Tsukuba)

Keywords: Turkic languages, Southeastern branch, Turkmen, Deontic modality, Epistemic modality

This study examines two forms used to express “necessity” (deontic modality, meaning ‘it is necessary (that/to...)’) in Turkmen (Turkic languages, Southeastern branch): 1. Obligative *V-mAll*, 2. Necessity construction *V-mAk(IIk) gerek* [V(erb stem)-VN necessary]. The semantic issue in question is whether both the abovementioned forms express epistemic modality, because, Turkmen grammar reference books do not mention anything about this aspect. However, studies on Turkic languages have indicated ambiguity between deontic and epistemic modalities. A contrastive study of subjective modal auxiliary verbs in Japanese and English (e.g., the English epistemic modal auxiliary *may*, *daroo* in Japanese, etc.) found that subjective modal auxiliary verbs (a) do not have negative and past form, (b) are not included in interrogative sentences and temporal/conditional clauses, and (c) do not come within the ambit of the sentential pronoun *it/so*. These constraints should therefore restrict the above two Turkmen forms as well. However, previous studies do not contain any information about these constraints. This study clarifies the differences between the two Turkmen forms expressing necessity by resolving the abovementioned semantic and formal issues through examinations conducted with two native Turkmen speakers. The examinations focused on meanings (translation examination and acceptability evaluation) and clarified that *V-mAll* could express both deontic and epistemic modalities while *V-mAk(IIk) gerek* could not be used to express epistemic modality. The examination focused on forms (acceptability evaluation) clarified that *V-mAk(IIk) gerek* does not express epistemic modality, so the verb stems in *V-mAk(IIk) gerek* do not follow the item expressing tense. Therefore, it is concluded that in Turkmen, *V-mAll* could express epistemic modality while *V-mAk(IIk) gerek* could not.

(ひだか・しんすけ hidaka.shinsuke.gt@u.tsukuba.ac.jp)